

多声モデル生成法としての 複線径路等至性アプローチのための試論

A Pilot Study for Trajectory Equifinality Approach As a Polyphonic Model Production Method

丸山千歌・小澤伊久美
MARUYAMA Chika, OZAWA Ikumi

〔要旨〕

多文化多言語化が進む日本社会にとって知日派・親日家の存在は重要である。2020年5月1日現在の外国人留学生数は279,597人で新型コロナウイルスのパンデミック期を除けば増加の一途をたどっており（日本学生支援機構2021）、知日派・親日家の育成を考える上で、留学生が日本・日本語を自分の人生にいかに関与し、変容を促すのかを丁寧に分析する必要がある。本稿は、このような考えに立ち、丸山・小澤（2018、2019、2020、2021a他）の成果と課題を整理した上で、やまだ（2020）の多声モデル生成法に基づき、丸山・小澤（2021a）を再分析し、複線径路等至性アプローチが多声モデル生成法の一つの在り方として機能するということを試論として示す。

Key word: 複線径路等至性アプローチ、多声モデル生成法、日本語学習、卒業後の進路、
日本社会との関係を維持



1. はじめに

多文化多言語化が進む日本社会にとって知日派・親日家の存在は重要である。2020年5月1日現在の外国人留学生数は279,597人で新型コロナウイルスのパンデミック期を除けば増加の一途をたどっており（日本学生支援機構2021）、知日派・親日家の育成を考える上で、留学生が日本・日本語を自分の人生にいかんにか位置付けるようになったかの解明が必要であろう。

しかし、複雑に事物が絡み合って進行する個人の人生（ライフ）の現実を考えると、人は同じような経験をしたからといって同じ径路を辿るわけではなく、元留学生の人生の径路に何がどのように関与し、変容を促すのかを丁寧に分析する必要がある。そこで筆者らは調査協力者（以下、協力者）に寄り添い、その内面探索を促すインタビューが可能な個人別態度構造（Personal Attitude Construct: PAC）分析法（内藤2002）¹⁾と、文化心理学を基盤とする複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）（安田・サトウ2017）を用いた研究に取り組んできた（丸山・小澤2018、2019、2020、2021a他）。

文化心理学では文化を「個人が日常的に相互行為を行う他者や人工物（道具）」（上村2018、277）と捉え、「自己と文化とが相互に関係しながら個人が文化を創り上げる」（木戸・サトウ2019、10）と考える。TEAは人間の文化的発達を、非可逆的時間と文化社会的文脈との関係の中で捉え、潜在性や可能性の中で実現した径路を可視化する方法論的枠組みである。その際、「未来と向き合う何らかの機能を持ち、過去の状態から何か新しいことへと導く何か」を「記号」と定義し（前掲、36）、人生の径路に記号がいかんにか作用するかを考察する。

筆者らの一連の研究は元留学生である協力者4名の人生の径路、等至点（Equifinality Point: EFP）や分岐点（Bifurcation Point: BFP）などを明らかにしたが、新たな研究課題も生まれている。一つはBFPに関する分析で、どのような葛藤の中でいかなるメカニズムから径路がEFPに向けて収斂していくかをより微細に解明する必要があるということである。もう一つは各考察が、日高（2021）が指摘する「ビクワード（非常に抽象的で、なんでも含めてしまう言葉）におさまりがちで、社会実装としての機能を高める展開が求められるということである。後者は質的研究において「いかにモデル化するか」という課題であるとも言える。この点を検討する上で、やまだ（2020）の多声モデル生成法は示唆に富んでいる。

そこで本稿では、上述の課題2点を問いとして、多声モデル生成法に基づいてTEAにおけるモデル化に取り組んだ事例を報告する。それを踏まえ、TEAが多声モデル生成法の一つの在り方として機能するということを論じたい。

2. 問題の所在と背景

前述の筆者らの一連の研究では、日本での1年の交換留学を経て大学を卒業した後、日本に住み、働き続けることを選択して数年以上経過している元日本語学習者4名を歴史的構造化ご招待

(Historically Structured Inviting: HSI) により「お招き」した。調査方法は丸山・小澤 (2021a) に詳述したが、この4名の協力者に PAC 分析を実施し、そのインタビューに基づいて「日本や日本語と関わりを持ち続けて生きる」を EFP として複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling: TEM) による図を個別に作成した。その TEM 図を介したトランス・ビューの中で、協力者それぞれが日本社会と関係を持ち続けるに至る径路を特定し、理論的にあり得た径路や、径路の分岐に作用する記号の働きを各人について可視化した。

丸山・小澤 (2020) では、4名についての個別の分析を行った先行研究に基づき、彼らの径路の共通点や相違点を整理した結果、EFP について、そして EFP に至るまでの径路の分岐に関わる必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP)、社会的方向付け (Social Direction: SD) や社会的助勢 (Social Guidance: SG) に関し、次のことを明らかにした。まず、EFP については、研究開始当初「日本や日本語と関わりを持ち、日本で生活し続ける」と想定し、両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point: P-EFP) も「日本や日本語と関わりを持ち、日本で生活し続けることを諦める」としていたが、「日本に住まないとしても、日本や日本語と関わりを持ち続けて生きる」がこの4名にとっての EFP、つまり 2nd EFP であったことがわかった。また、そこに至るまでに、「日本がいいと思う」、「日本でやっていると確信を持つ」という OPP が共通して存在する可能性が高いことがわかった。そして、日本社会と向き合って生きていく、生きていけるといふ確信を彼らが持つに至るには、「家庭環境」「友人 (言動や振る舞い)」「個人の性格」「日本の社会のあり方」「留学制度」「日本語力」といった SG が重要な役割を果たしている可能性を指摘した。一方、SD は共通項が少なく、東日本大震災やリーマンショックといった社会事象は比較的共通して表れるものの、各人固有の出来事などが前述の大きな社会事象と同じ、またはそれ以上の力で EFP への経路を阻害・抑制している様子が明らかになった。

安田 (2015) は、TEM による研究は異なる位相の TEM 図を行き来して考察を深める中で「鳥瞰的にライフの全貌を見渡しつつ、一方で地べたを這う亀のようにしてより詳細に行動選択の多様性・複線性を把握するというように、分析者の立ち位置・視点を、マクロとミクロに自在に行き来させながら、実存的経験を把握・理解することが可能となる」(50) と述べている。また、TEA では、対象者が1人の場合には個の豊かさを明らかにすることができ、4 ± 1人の場合には多様性が可視化され、9 ± 2人の場合には類型化が可能になるという「1/4/9の法則」が実施者らの経験則として指摘されている (安田・サトウ、2012)。これに関して荒川 (2015、169) は、この法則に言及しつつ、TEM 研究において「4事例程度や9事例というのは複線性や共通性をもっともみられやすい数であり、また、すでに基本的要素が概ね出つくしている数でありながら、径路の抽象化の程度も高くなりすぎずにすむことが多い。」と指摘している。

筆者らの研究でも、4名の径路の多様性を明らかにする過程で、個々の協力者を対象にした段階では可視化されなかった OPP や SG の存在などを捉えることができた。しかし、一方で、研究成果が社会実装できるものになっていないのではないかと、過度に抽象化して1事例から得られる豊かさを必要以上に失っているのではないかという懸念を抱くことになり、TEM 研究におい

ていかにモデル化すべきかという課題が発生したのである。

TEMは「複線径路等至性モデル」から「複線径路等至性モデリング」に名称を変更している（安田・サトウ 2017）が、「ing」という動詞形にしたことにはTEMが「モデルを生成する」手法であることを強調する意味が込められている（サトウ 2022）。しかし、TEM研究あるいはTEA研究において、モデル化にいかに取り組みかが正面から論じられたことは管見の限りではない²⁾。そこで本稿では、このような背景から、やまだの多声モデル生成法に基づいて筆者らの前述の研究を再分析し、TEA研究におけるモデル化について考察することとした。

3. 多声モデル生成法

現在、質的研究には多数のアプローチが存在し、質的研究を定義することは以前に増して困難になっているが、そこには「人びとは周りにある世界をどのように作り上げるのか、人びとは何をしているのか、人びとに何が起きているのかを、意味のある豊かな洞察を与える言葉でひも解こうと試みる」という共通の特徴があるとフリック（2016、iiv）は指摘している。1990年代のナラティブ・ターン（物語りの転換）³⁾以降、社会・文化・歴史的な文脈の中での相互作用によってものが共同生成されるという認識が広まり、質的研究者は当事者の経験の意味づけに関心を向け、領域固有で社会・文化的な文脈を含むローカルな理論を目指すようになった。そこで問題となっているのは、どのようにアプローチすれば「意味のある豊かな洞察を与える言葉でひも解けるのか」ということだ。

この議論を牽引してきたやまだ（2020）は現場を、質的研究の対象となる現象と研究がおこなわれる場の特徴を象徴する用語として捉えて「複雑多岐の要因が連環する全体的・統合的場」と定義し（100）、現象にアプローチする方法論として「モデル生成法」を提唱したが、それをさらに「多声モデル生成法」へと発展させてきた。ここでいう「モデル」とは、「現象を相互に関連づけ包括的にまとめたイメージを示すと共に、そのイメージによって新たな知的活動を生成していくシステム」（126）であり、「個々の具体的事象をより一般化して認識していく働き、つまり『知る』ための『知的活動の図式（schema for knowing）』」（128）という動詞形で考えたものであるという。

やまだはモデル生成法を生み出すもとになった問いを次のように記している（前掲、124）。

海の砂を一粒ずつ拾うような個々の具体的な現象記述だけでは、現場のローカルな知には貢献するが、他の現場には応用できない。また、先行研究や従来の概念との相違を明確にするなど、学問知と対話して説明する努力をしなければ、独りよがりになり、学問としての知の体系に貢献できない。そこで、現場における現象記述や事例記述を重視するとともに、それだけで終わるのではなく、何らかの一般化は不可欠だと考えるのである。

ローカルで多様、1回的で再現性をもちにくい現場の特徴を重視しながらも、それをいくつかの現場に共通するようにひらき、より一般化できる新しい知を生み出していくには、ど

うしたらよいだろうか。どうしたら、インターローカルな知にしていけることができるだろうか。

この問いに向き合う中で、やまだ（2020、124）は当初、現場のデータをもとにしてモデル生成するというボトムアップの方向性を強調したモデル生成を論じていたが、その後、ボトムアップだけでなく、理論から出発してトップダウンでもモデルを生成する方向も重視するようになり、両方のモデルを「対話」させる対話的モデル生成法を生み出したのだという。そして、バフチンの論考をもとに、二者間の対話からアイテム順や時間的・空間的ズレを生んだ多声対話へと発展させた（前掲、125）。

多声モデル生成法の特徴は以下の通りである（前掲、125-126）。

1. 生成されるモデルは、あらゆる場面に適用可能な、普遍的、一般的モデルではなく、限定された領域で限定された目的のために、多数生み出される。
2. 生成されるモデルは、堅固な概念構造で構築される完璧な構築物のようなモデルではなく、参画者の修正や追加や省略などの生成し直しを促しやすい、柔軟なネットワークモデルである。モデル自体が「生きもの」のように現場や研究者に合わせて適応に変化し、必要に応じて変形し、発達していく。
3. 生成されるモデルは、モデルが生み出すイメージによって、新たな対話を生み出し知的活動を生産していく、それ自体が生きもののようなモデルである。
4. 生成されるモデルは、そのもとにある現場データと対話されるだけではなく、多種のモデル相互間で多声的に対話される。

やまだ（2020、121-174）では以下の三水準のモデルを用いたモデル生成の実例をもとにして、多声モデル生成法の説明がなされている。

モデルⅠ 抽象モデル — 基本枠組（framework）

基本構図を成立させる前提となる枠組、骨格、構造にあたる部分。基本構図の描き方を決める額縁。抽象度が高く複数のモデルを共通して位置付ける基礎的骨格を提供。

モデルⅡ 媒介モデル、半具象モデル — 基本構図（composition）

モデルⅠとモデルⅢの対話から生成される中間形の媒介モデル、あるいは半具象モデル。現場の個別データの具体性にある程度密着しつつも一般化が可能なレベルのモデル。目的に応じて、どの程度の抽象度の内容を盛り込むかは多様。

モデルⅢ 具象モデル — 基本単位（unit）、基本形（fundamental figure）、事例⁴⁾

個々の現場データの具体的なイメージから、ボトムアップで基本単位を取りだしたもの。個々の人々が描いた生のイメージにもっとも近く、ローデータを直に反映したモデル。次の基本構図をつくるときの構成単位となる場合と、それをカテゴリー化して分析に用いる場合がある。

次章では、やまだの多声モデル生成法に基づき、前述の筆者らの研究データを用いて上記の三水準のモデルの生成を行った結果を報告したい。

4. TEM 図を活用したモデル生成の試み

4.1 本稿のモデル生成の目的

本稿は、日本社会と関係を持ち続けるに至った元留学生が通過した個別の径路を、現場感を保ちながら理論的に捉えることを目指して、PAC と TEA のインタビューデータを用いてモデル生成を試みる。

やまだ（2020、131）は3つのモデルの相関を図にまとめているが、これを応用して本稿が将来的に目指したいのは図1であり、モデルIIIとモデルIを往還する中で、社会実装に生かせる半具象モデル（モデルII）を生成することである。第1章で指摘したように筆者らの課題の一つはBFPをより微細に分析することであるが、後述するTEM図には7つのBFPがあるので、各BFPを分析し、個別性を一定に保ちながら、モデルIに近づけたモデルIIを生成していくことになる。本稿はその端緒として、BFPを1つ取り上げて、モデルIIの生成を試みる。

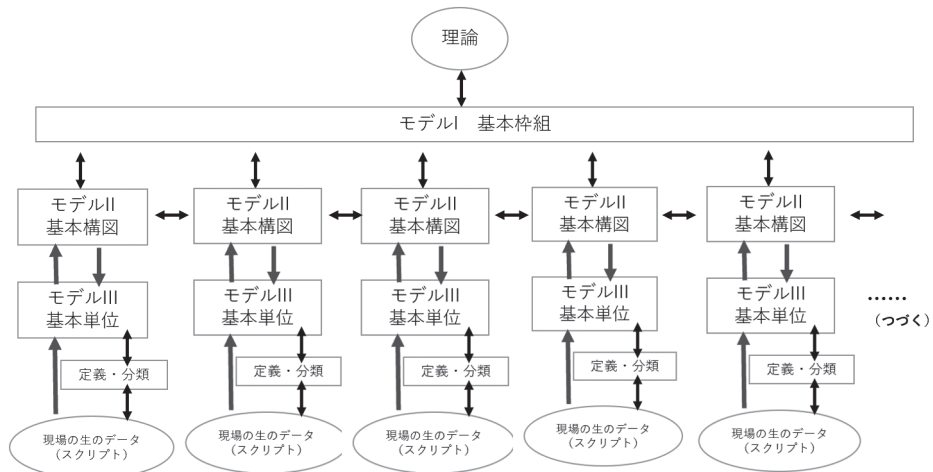


図1 やまだ（2020、131）を活用して本研究が目指すもの

4.2 研究対象としたデータ

丸山・小澤（2021a）と同一の協力者Cを事例とする。協力者Cの概要は表1の通りである。インタビューの方法は丸山・小澤（2021a）を参照されたい。

表1 協力者Cの概要 (丸山・小澤 2021a より再掲)

| | |
|-------------|---|
| 出身地 | オーストラリア |
| 年齢・性別 | 30代・女性 |
| 職業 | 大学の常勤講師 |
| 言語背景と日本語学習歴 | 非漢字圏。敬虔なクリスチャン家庭で育つ。中等教育で2年日本語・日本文化学習、大学入学決定後に1年間広島の高校へ留学、大学でアジア研究と美術を専攻、1年の日本への交換留学を経て卒業。その後しばらくしてから日本の大学院に進学（専攻は日本研究）。修士号取得後、博士課程に進学するが満期退学。その後、日本に残り、非常勤で大学職員や英語教師などを経験。数年前から日本国内で常勤大学職員として勤務。 |
| 母語 | 英語 |
| インタビュー実施時期 | 1回目：2017年11月2日（約5時間、内インタビューは1時間） 2回目：2017年11月17日（約2時間） 3回目：2018年2月8日（約1時間50分） 4回目：2018年3月8日（約1時間半） 5回目：2018年6月14日（約1時間半） |

丸山・小澤（2021a）が示した TEM 図にある BFP が本稿の分析対象である。本研究では TEM 図を描く上で必要な諸概念（安田・サトウ 2012）を表2のように設定した⁵⁾。

表2 TEM図に関わる諸概念と本研究における具体的概念（丸山・小澤 2021a を一部改編）

| 概念 | 本研究における具体的意味 |
|-------------------------------------|--|
| 等至点 (EFP) | 日本や日本語と関わりを持ち、日本で生活し続ける |
| 両極化した等至点 (P-EFP) | 日本や日本語と関わりを持ち、日本で生活し続けるのを諦める |
| 第二の等至点 (2 nd EFP) | 日本や日本語と関わりを持ち続けて生きる |
| 両極化した第二の等至点 (2 nd P-EFP) | 日本や日本語と関わりを持ち続けて生きるのを諦める |
| 分岐点 (BFP) | ① 交換留学を検討 ② 広島的女子校に留学する ③ 大学時代に交換留学をする ④ 大学を卒業、アルバイトを継続する ⑤ 大学院（博士課程）生活開始当初リズムが作れない ⑥ クリスマスのために一時帰国する ⑦ 大学院（博士課程）を満期退学する |
| 必須通過点 (OPP) | ① 日本がいいと思う ② 自分にとって Comfortable な場所で生活したいと思う（ずっとではないかもしれないが、それが今は日本） |
| 社会的方向付け (SD) | ① AFS の年齢制限 ② 日本語でたくさん話しかけられるし、英語も使えない ③ 教会からのケアが不十分（言語の問題、物理的問題） ④ 日本語をたくさん勉強しなくてはならない ⑤ 気候の違い（太陽が足りない） ⑥ 日本語ができるのに英語で話しかけられる ⑦ 生活の問題（経済的問題、ビザの問題） ⑧ 友達の不在、友達の存在 |

| | |
|------------|--|
| 社会的助勢 (SG) | <ul style="list-style-type: none"> ① 信仰 (教会、牧師、神との交わり、祈り、神に導かれる) ② 家庭環境 (両親やきょうだいも海外に目を向けている、子どもの自立を促す母親の存在、両親のサポート) ③ 初中等教育段階における外国語教育という国策 ④ 料理・食文化への関心 ⑤ Defer 制度 ⑥ 留学制度 (高校段階、大学の交換留学) ⑦ 奨学金制度 ⑧ 困難なことに挑戦する性格的要因 ⑨ 友達の存在 ⑩ 将来の見通し、仕事の達成感 ⑪ 日本語ができる (何でもできる、表現できる) |
|------------|--|

協力者 C が 2nd EFP 「日本や日本語と関係を持ち続けて生きる」に至るまでの経験を第 I 期から第 VII 期の 7 つの期間に区分し、TEM 図 (図 3) に表した。図 2 は凡例である。

- 第 I 期 日本・日本文化に関心を持つ
- 第 II 期 大学で日本・日本語を学ぶ
- 第 III 期 大学への交換留学を経験する
- 第 IV 期 日本の大学院に留学する
- 第 V 期 ホームシックになる
- 第 VI 期 日本が居場所だと感じる
- 第 VII 期 退学後

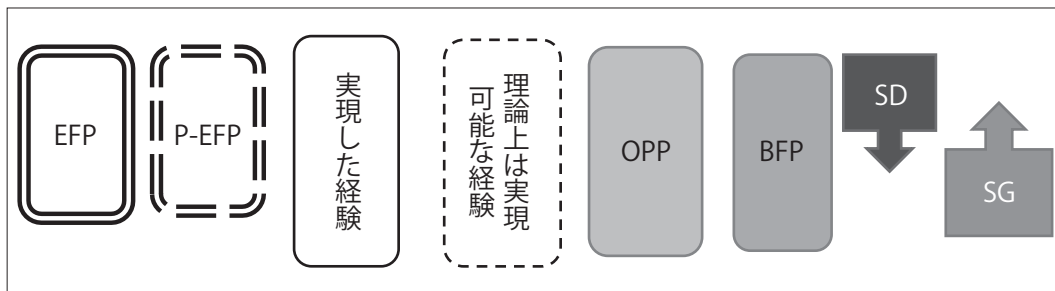
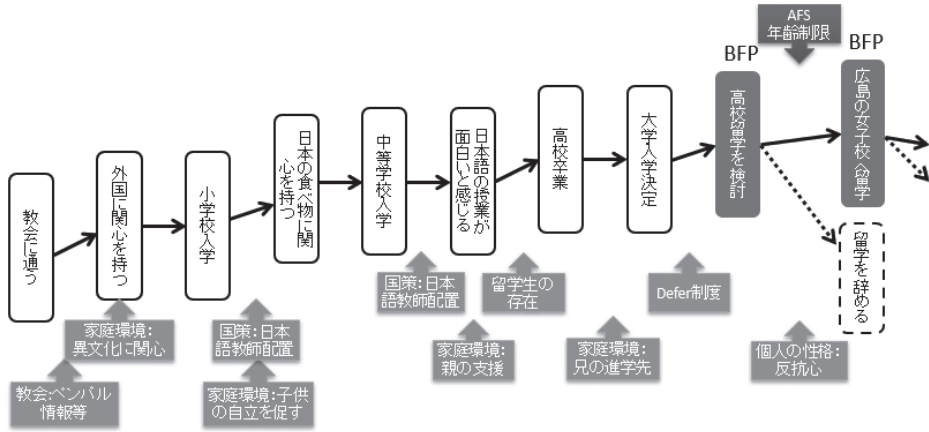
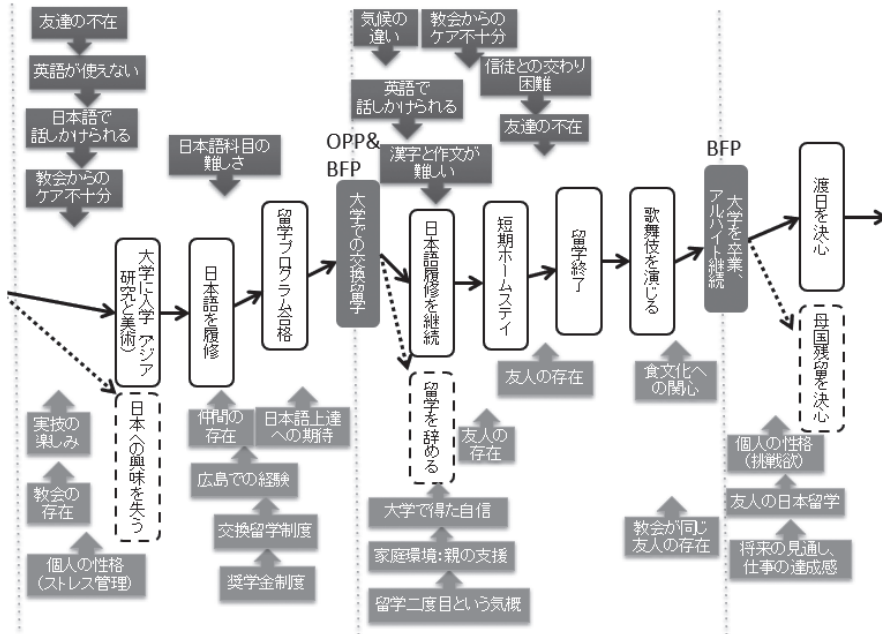


図 2 TEM 図の凡例



第1期: 日本・日本文化に関心を持つ

図 3-1 協力者 C の TEM 図 (1/4)



第2期: 大学で日本・日本語を学ぶ

第3期: 大学への交換留学を経験

図 3-2 協力者 C の TEM 図 (2/4)

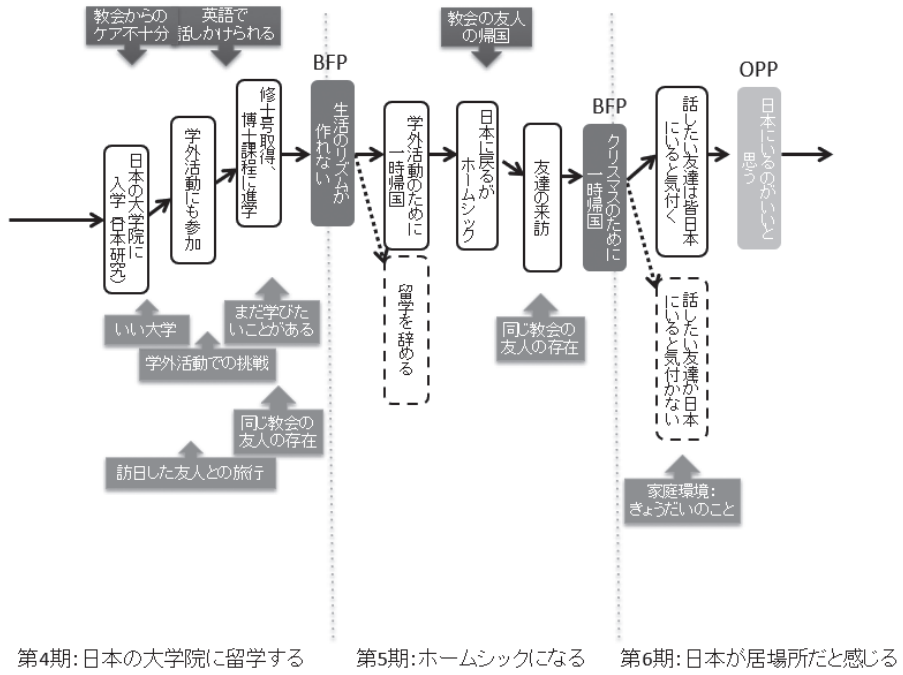


図 3-3 協力者 C の TEM 図 (3/4)

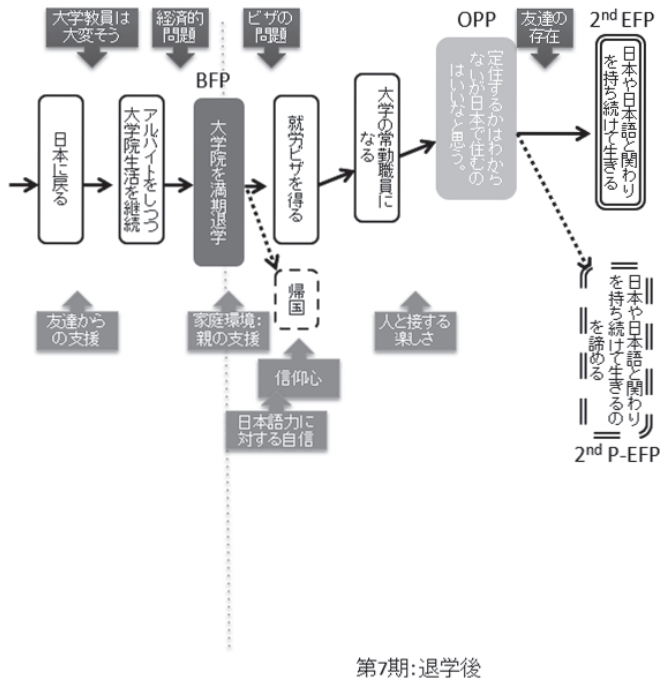


図 3-4 協力者 C の TEM 図 (4/4)

4.3 本稿が扱う BFP の選定—多声モデル生成法におけるモデル III の生成—

丸山・小澤（2021a）は BFP を 7 つあるとしているが、本稿が取り上げるのはそのうちの 1 つ、BFP ①である（図 4）。

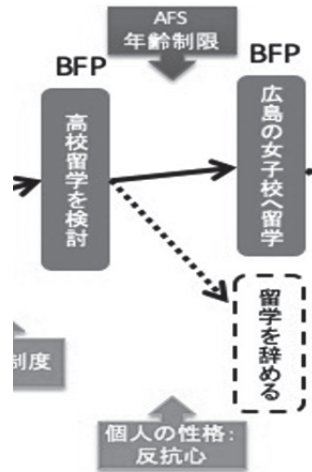


図 4 モデル III となる BFP ①

この BFP ①は、丸山・小澤（2021a）で、「第 1 期 日本・日本文化に関心を持つ」時期に位置付けられ、生来人とコミュニケーションをとることが好きで、高校時代に高校を訪問してきた日本人の先生の存在があり、高校が毎年ロータリーの留学生を受け入れていたことや、父親が「盆栽」を趣味にしていたこと、兄がタイや韓国に留学したことなどが影響して、自分も留学を考えるようになったとしている。

しかし、詳細を言えば、留学に際して行き先として希望を出していた日本は、応募した留学プログラムが年齢制限をかけていた。そのために、留学プログラムから、留学がしたいのであれば日本以外の国を選択する、日本に行きたいのであれば応募を諦めるという選択肢のどちらかを選ぶようにという要求があり、協力者 C にとって日本留学の実現が危ぶまれる事態が起きている。後述の通り、協力者 C は日本に行く方を選択し、それを実現させるために、違う留学プログラムを見つけ、日本留学を果たす。この「留学」を選んで日本以外のところへ行くか、「日本留学」を選ぶかの分岐点が BFP ①である。

インタビューで、協力者 C は、最初の日本留学について《ここですごい線が引ける》⁶⁾とし、最初の日本留学の経験を人生の大きな転換期として位置づけている。濃厚な留学経験により自身の交遊関係も変わったことを《その 1 年間すごい、つらかったし、よかったし、すごい経験、人生経験深めた。1 年間で。なんか、その高校を卒業してから、そのまま、残ってる人、なんかもう私と、何という》表現しており、BFP ①が、本人にとって特に重要な意味を持つ BFP であることがわかる。

日本へ行きたいという強い願いがあり、派遣の選考では人物面でも問題がないことが確認されていた。それにもかかわらず、年齢制限が日本だけに適用されていることを選考後に知らされ、これにより日本留学が実現しないかもしれないという事態が起きたBFP①は、協力者Cが経験した7つのBFPの中で、特に葛藤が大きかったように思われる。そこで、BFP①に焦点をあててそこにかかる力を分析し、その変容のメカニズムをモデル化したいと考えた。

4.4 本研究が設定したモデルI

BFP①を解明するために、本稿は Valsiner (2016) の Triple Gegenstand 理論 (図5) をモデルIとして設定した。Gegenstand は英訳すると“object (対象)” という意味だが、“Gegen + stand” (stand against us) という語義からわかるように、客観的に存在する物体そのものではなく、対峙する行為が向かう対象のことである (Valsiner 2014)。Valsiner は、人間が行動している現在には、行為と対象とが作り出す境界・障壁が発生しており、その現在こそが人間の心理を探究する最小限のユニットになるとしている (Valsiner 2016)。Triple Gegenstand は、何かに向かう動き、それに抵抗する動き、振り返りの3つが関わる構造である。図5の矢印Aはゴールを志向して何かをしようとする動き、それに対して矢印Bはそれに抵抗する動き、その両者の間には境界が発生していてAが進展する (未来に進む) 上での障壁となっている。そこで境界との関係についての自己反省する矢印Cの動きも発生する。人間はこの境界を越えて (更新して) 過去から未来へと進むわけだが、そこではどのように記号が作用しているのか、対立し膠

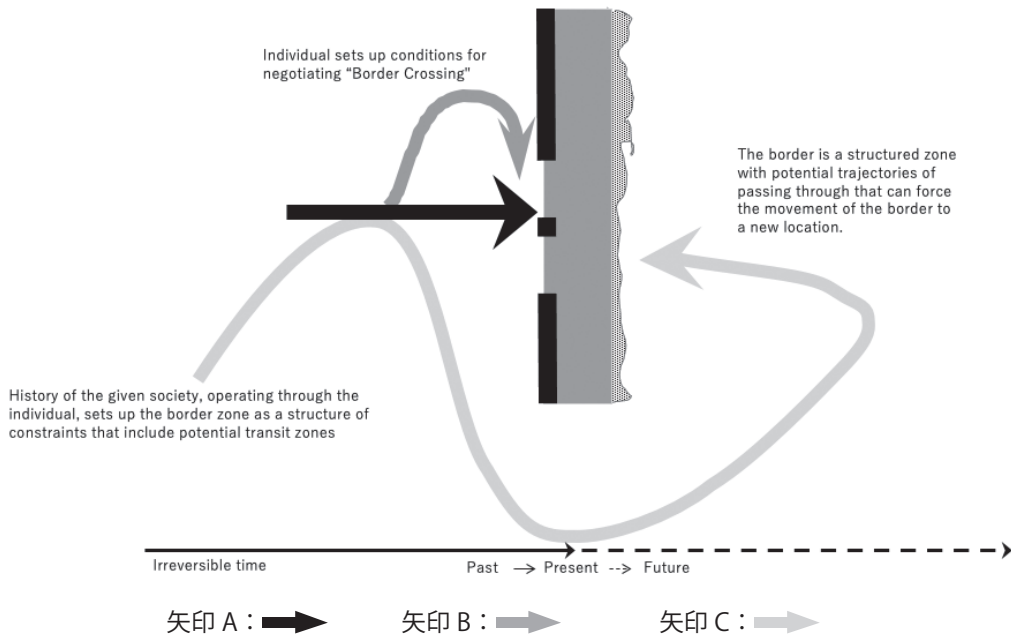


図5 Triple Gegenstand (Valsiner (2016, 9) の Figure 6 を一部改編)

着している葛藤をいかに飛躍して前進するかを考える上で Triple Gegenstand が示唆を与えてくれると考え、これをモデルⅠとした。

やまだ（2020）はモデルⅠについて「既成の理論やモデルをあてはめる印象を持つが、そうではなく、抽象度の高さを示すもので、基本枠組みモデルⅠも、データとの往還の中で修正され洗練される」（130）としている。本稿も同じ考えに立ち、モデルⅠを捉える。本稿で三水準のモデル生成を試みる上で、Triple Gegenstand をモデルⅠとして設定したが、それは本稿で考察したい BFP を微細に分析する目的からモデルⅠとモデルⅢとの往還をするには Triple Gegenstand が良いと判断したからである。しかし、TEA がよってたつ理論的枠組、つまり、非可逆的な時間の流れの中で人間のライフを捉え、複数の径路が等しくたどりつく等至点を設定する中で、径路を捉え、その分岐について考えるという枠組も、この意味でモデルⅠであると言えるだろう。また、本稿は、モデルⅠは、研究課題によって異なるものだという理解でいる点も言及しておきたい。

4.5 モデルⅢから生成されたモデルⅡ

4.5.1 オープンコーディング

モデルⅡの生成に際して、モデルⅢのもととなった PAC インタビューデータおよび TEM 図生成のためのインタビューデータを分析し直す技法として、オープンコーディングを選定する。日高（2021）は、KJ 法、GTA、SCAT などのコーディング技法と比較しながら、オープンコーディングが用途を限定しない技法であり、GTA に含まれるほか独立した技法としても使用例があると説明している。本稿が、モデルⅠは研究課題によって多様な形をとりえると考えていることから、用途をより柔軟に検討できる可能性がある技法を採用したいと考えた。

データの抽出は、3つのインタビューデータから BFP ①に関する発話をセグメントとして抜き出した。その結果、最終的に9個の概念が生成された。これらのカテゴリーを最も適切に説明する枠組みとして、上述の Valsiner（2016）の Triple Gegenstand 理論を採用した。

4.5.2 BFP ①から生成されるモデルⅡ

本稿が最終的に生成した BFP ①のモデルⅡは図6の通りである。以下、図6に至る経過を説明する。

BFP ①は、協力者 C が高校卒業後にはじめて日本留学をかなえるときに生じる。具体的には、高校卒業後に、日本に留学したいと思って、海外留学プログラムに申し込み、晴れて選考を通過するが、複数ある行き先のうち、日本だけが高校生までという年齢制限があることが知らされ、「日本か、留学か」を迫られることになった。年齢制限は、高校生以上だと独立心が強く、ホストファミリーとうまくいかないということを理由にかかっていたのだが、本人としては、「こんなにナイスガール」なのに、年齢を理由に日本だと留学できないのは納得がいけないと怒りを覚える。もう一方で、日本でなければ年齢制限がなく、留学そのものは実現するので、矢印 A と、矢印 B によって、心理的葛藤が生まれた（図6-2）。

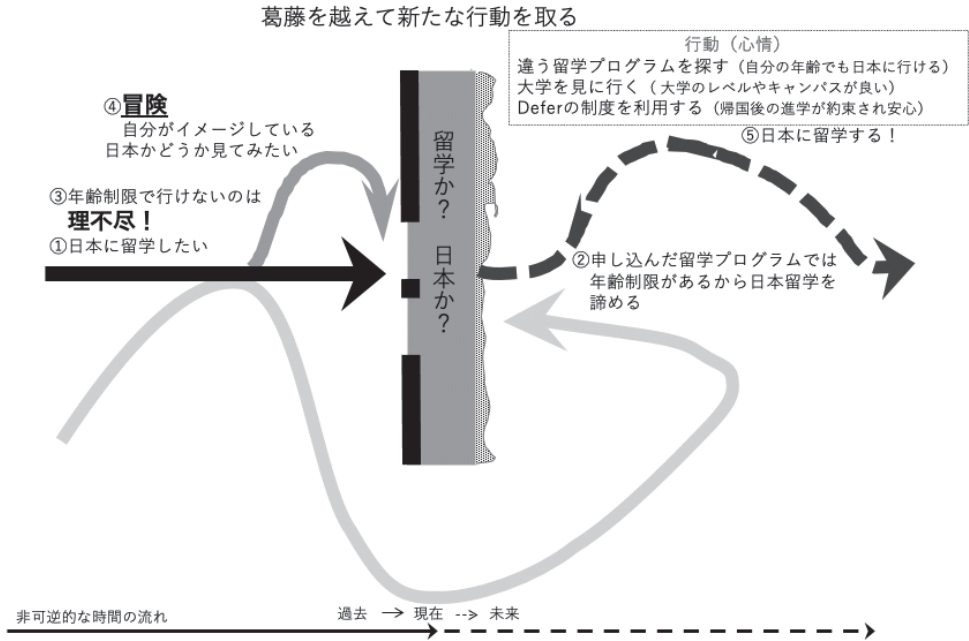


図 6-1 最終的に生成した BFP ①のモデル II

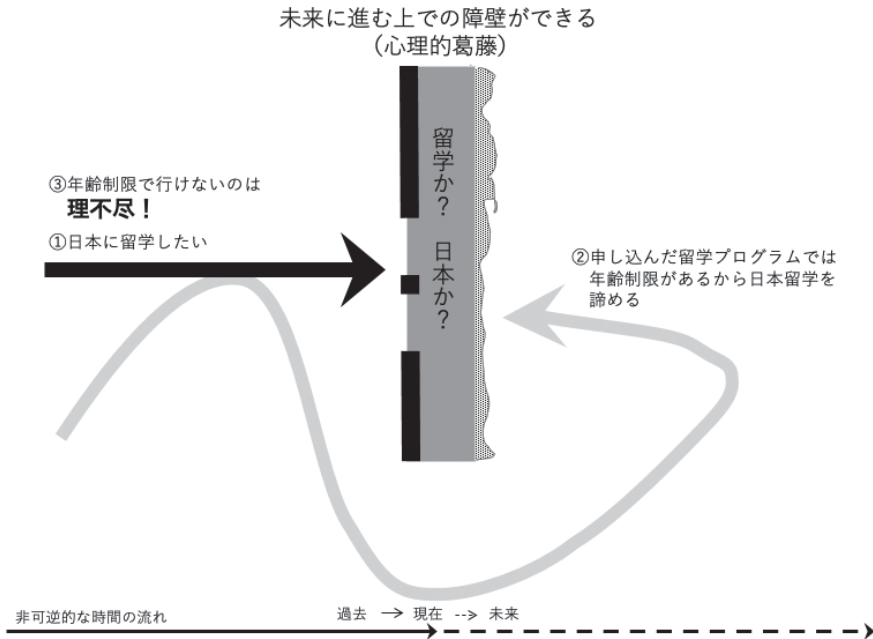


図 6-2 協力者 C の心理的葛藤「留学か？ 日本か？」

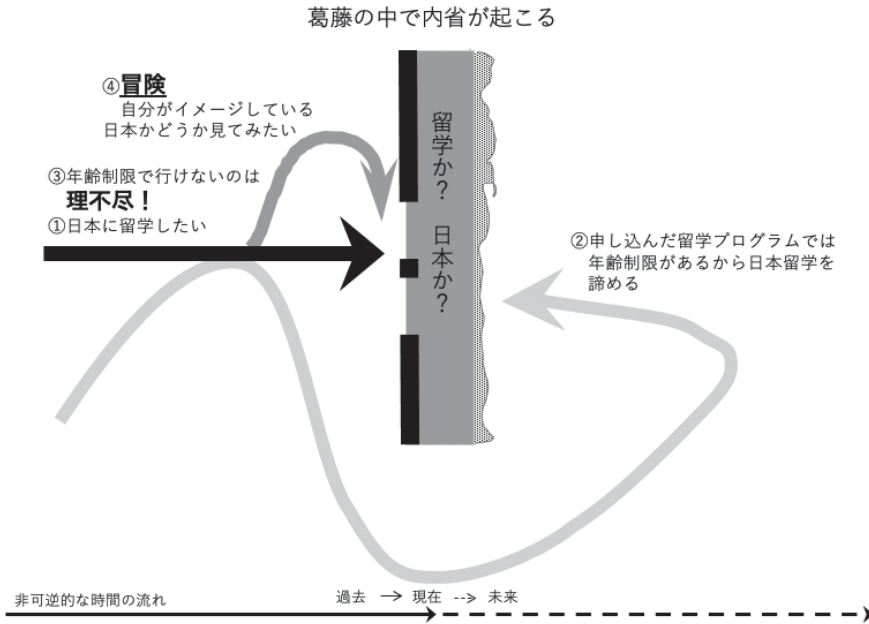


図 6-3 協力者 C の中に生じた矢印 C

このときに、教科書に描かれていた「70年代の」「皆パーマ」で「ポンチョ」を来ている日本・日本人のイメージが本当にそうなのか、そのような国なのかを確かめたいのだ、という気持ちに気づく（図 6-3）。

そこで、別の留学プログラムを探し、Defer 制度（入学確定が約束された上で入学時期を遅らせることを認める制度）がある大学に入学することを決めて、1年留学して帰国したあとの進路が確実という安心感もあって、日本留学を果たした（図 6-1）。

最初に申し込んだ留学プログラムにこだわりつづけていたら、心理的葛藤が続くが、「自分が持っている日本のイメージが本当にそうなのか確かめたい」という気持ちが、新たな要素として加わったことにより、この膠着状態から回避できた、という関係がモデル II（図 6-1）となる。

モデル I とモデル II の違いは Valsiner（2016）の Triple Gegenstand 理論が提示した 3 つの要素以外のラベルがある点である。それは、心理的膠着の打破への刺激となる第 3 の要素「冒険：自分がイメージしている日本かどうか見てみたい」をきっかけにして、日本留学実現に向けた布石、例えば「違う留学プログラムを見つける」であることだ。BFP ①の日本留学の選択を説明するには、葛藤を抜け出すこれらの要素が欠かせない。その他、図 6-1 に書き込んでいないが、家庭での教育など、長い時間をかけて形成された協力者 C の留学に対するレディネスも、図 6-1 で示した現象に影響を与えている要素であろうことにも言及しておきたい。

さらに本稿で触れておきたいのは、膠着状態に影響を与える第 3 の要素「冒険：自分がイメージしている日本かどうか見てみたい」に「冒険」というラベルをつけたことである。このキーワードは、協力者 C のインタビューの中で度々出てくるが、BFP ①の成功体験がその後の BFP に

影響を与えていることや、本人の気質を支える要素になっていると感じさせるものである。今後、「冒険」を軸にして、杉浦（2004）の転機に関する論考なども参照しながら、複数のBFPを分析していくことも必要であろう。

このようにモデルⅡの生成をする中で、モデルⅢで示されたSD「年齢制限」や、SG「個人の性格 反抗心」「Defer 制度」の関係性、加えて幼少期に記されているSG「家庭環境 異文化に関心」などとの関係がより現場感をもって立ち現れてきた。このような分析をさらに積み重ねる中で、モデルⅠが日本語教育版として修正され、洗練されていく可能性があるという感触もある。今回生成されたモデルによって新たなモデル生成への気づきが得られ、知的活動が活性化されたと筆者らは感じている。

また今回の分析において、TEM というツールがモデル生成を促す機能を果たしていることも実感された。理由の一つには、モデルⅢを設定する上でTEM 図を描いて径路を特定し、BFPを選定できたことがある。また、非可逆的な時間の流れの中で変容を図に描いて分析するツールであることがモデル生成を試行錯誤する上で有用であった。モデルⅠのTriple Gegenstand も図式化されており、本稿のモデルⅠ、Ⅱ、Ⅲのいずれも図としてまとめることが思考を深める上で役に立ったという感触がある。モデル生成においてTEA がビジュアル化しながらモデル化するツールであることが効力を持っているということを改めて確認したと言えるだろう。

5. 考察とまとめ

本稿は、まず、丸山・小澤（2018、2019、2020、2021a 他）の成果と課題を整理した上で、BFPに関する分析で、どのような葛藤の中でいかなるメカニズムから径路がEFPに向けて収斂していくかをより微細に説明する必要があるという課題、また、質的研究において「いかにモデル化するか」という課題を挙げた。そして、これらを検討する上で、やまだ（2020）の多声モデル生成法を参考にしながら、TEAにおけるモデル化に取り組んだ事例を報告し、TEAが多声モデル生成法の一つの在り方として機能するという試論として示した。

この論考を進める中での気づきは次の2点に整理できる。やまだ（2020）が提案するモデルⅡの生成過程は、安田（2015）が述べるTEA研究の「分析者の立ち位置・視点を、マクロとミクロに自在に行き来させながら、実存的経験を把握・理解すること、研究成果を社会実装につなげる技法として有用であろうということである。

前述のとおり、モデルⅠとモデルⅡの違いは、協力者Cで言えば、違う留学プログラムを探したり、Defer制度がある大学への入学を決めたりする「行動」や、第3の要素が誘発する背景にある協力者Cの年少期からの家庭の教育方針といったTEM図にあるSGの存在である。特に「協力者Cの年少期からの家庭の教育方針」は、BFP①だけに焦点を当てた調査では掘り起こしにくく、TEM図を生成したからこそ意識できたものであったと考える。この点でTEM図は、ミクロな分析を行う場合にも、マクロな視点を維持させるための有用な装置になりえる。

そして、モデルⅡの生成を通して得ることのできたモデルⅠへの理解は、日本語教育のフィールドをいかに形成していくかというコースデザインや、それを他者に説明し評価につなげるプログラム評価につなげて考えていくことができる。その点で、モデルⅡはより現場感があり、社会実装の機能を高めることに貢献しうるモデルになりえる。

モデルⅡの生成を通じた個々の学習者への理解は、いかにコースデザインをするかということだけでなく、各学習者の学習をいかにファシリテーションするかということにも貢献しえる。このようなことを念頭に置き、今後は（１）BPF ①と類似のBFPを抽出し分析を行うこと、（２）一つのTEM図に現れたBFPを多声モデル生成法を参考にしながら分析することで、BFPをより微細に分類し、考察を深めていきたい。

注

- 1) 小澤・丸山・サトウ（2021）は、Valsiner 他（2021）の議論を踏まえ、PAC分析法のインタビュウの性質について論じている。
- 2) サトウ（2022）では現在編集集中の書籍において取り上げられる予定であることが言及されている。
- 3) ナラティブによる認識論や方法論の変革。経験の記述が「時間的に離れた出来事を因果的に結びつける物語の形式をしているだけでなく、人間科学における説明形式自体が物語（ナラティブ）である」という着眼に基づくもので、心理学ではブルーナー（Jerome S. Bruner）が人間の思考様式を論理科学モードとナラティブモードに区別して、前者は一般的法則の探究、後者は出来事の体験の意味づけが目的であるとした（渡辺 2018）。
- 4) やまだ（2020）は、一つの事例を例示する場合も「事例モデル」という「モデル」として扱っている。それは無作為抽出で選ばれる1サンプルでもなく、均質な標本の一部でもなく、平均値や最頻値などの数量的な代表値とも異なる「代表例（representative）」が選ばれるからであるという。「事例は、研究目的に照らして何を例示するために選んだのか、なぜこの例が適切なのか、モデルとして代表させる理由など、『一般化可能性』『再現可能性』を自覚して記述される。」（127-128）
- 5) 表番号は、本稿に合わせて調整した。
- 6) 《 》内斜体は発話データからの引用である。
- 7) 本研究は科学研究費「『日本とつながって生きる』選択に見る日本語教育の新時代——元留学生の自己実現——」（基盤（C）課題番号 20K00707）の研究活動の一部である。
- 8) 本稿は、丸山・小澤（2021b）を下地に大幅な加筆修正を行ったものである。

参考文献

- 荒川歩（2015）「4-1 1/4/9の法則からみたTEM 事例数が教えてくれること」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編）『ワードマップ TEA 実践編』新曜社、166-171。
- 上村佳世子（2018）「文化心理学」能智正博他（編）『質的心理学辞典』新曜社
- 小澤伊久美・丸山千歌・サトウタツヤ（2021）「間モード再構築法としてのPAC分析」ポスター

- 発表)、2020年度人間科学研究所年次総会、zoomによるonline開催、2021年2月27日～3月6日、立命館大学人間科学研究所、https://www.ritsumeihuman.com/20th_anniversary/
- 木戸彩恵・サトウタツヤ編(2019)『文化心理学：理論・各論・方法論』ちとせプレス
- サトウタツヤ(2022)2022年1月13日にメーリングリストに送信されたメール
- 杉浦健(2004)『転機の心理学』ナカニシヤ出版
- 内藤哲雄(2002)『PAC分析実施法入門[改訂版]「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版
- 日本学生支援機構(2021)「2020(令和2)年度外国人留学生在籍状況調査結果」<https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/zaiseiki/data/2020.html>(2022年1月8日アクセス)
- 日高友郎(2021)「言葉のデータに翻弄されないためのオープン・コーディング入門(事前配信)」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会2021年度研究大会』大会企画ワークショップ資料、2021年8月8日。
- フリック・ウヴェ監(2016)『SAGE質的研究キット① 質的研究のデザイン』新曜社(鈴木聡志訳)。
- 丸山千歌・小澤伊久美(2018)「ある翻訳者が自立に至る径路——移動して学ぶある時代の日本語教育への示唆——」『日本語・日本語教育』1、立教大学日本語教育センター、19-35。
- 丸山千歌・小澤伊久美(2019)「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触—日本に住み、働きつづける日本留学経験者Bの場合—」『日本語・日本語教育』2、立教大学日本語教育センター、19-38。
- 丸山千歌・小澤伊久美(2020)「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、働きつづける日本留学経験者Dの場合——」『日本語・日本語教育』3、立教大学日本語教育センター、33-47。
- 丸山千歌・小澤伊久美(2021a)「日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触——日本に住み、働きつづける日本留学経験者Cの場合——」『日本語・日本語教育』立教大学日本語教育センター、35-54。
- 丸山千歌・小澤伊久美(2021b)「多声モデル生成法としての複線経路等至性アプローチ」『母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)学会2021年度研究大会』大会予稿集、66-67。
- 安田裕子(2015)「2-4 画期をなすこと 研究者の視点と所在」安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ(編)『ワードマップTEA理論編』新曜社、46-51。
- 安田裕子・サトウタツヤ編(2012)『TEMでわかる人生の経路——質的研究の新展開』誠信書房。
- 安田裕子・サトウタツヤ編(2017)『TEMでひろがる社会実装——ライフの充実を支援する』誠信書房
- やまだようこ(2020)『やまだようこ著作集第4巻 質的モデル生成法——質的研究の理論と方法』新曜社
- 渡辺恒夫(2018)「ナラティブターン」『質的心理学辞典』能智正博他編、新曜社、230-231。
- Valsiner, J. (2014). *An Invitation to Cultural Psychology*. Sage Publications Ltd.
- Valsiner, J. (2016). "Human Psyche on the Border of Irreversible Time: Forward-Oriented Semiosis" Invited address at the 31st International Congress of Psychology, Yokohama, July 27th, 2016.
- Valsiner, J., Tsuchimoto, T., Ozawa, I., Chen, X. and Horie, K. (2021) "The Inter-modal Pre-Construction Method (IMPreC): Exploring Hyper-Generalization." *Human Arenas*, <https://link.springer.com/article/10.1007%2Fs42087-021-00242-x>